

1 今年度のグランドデザインを振り返って

本校は「チャレンジを大切にする学校」を掲げて、5年目となります。子どもたちが、自分を磨き、仲間と磨き合うなかで、自己実現を図っていける場としての「学校」を目指してきました。子どもたちだけでなく保護者のみなさんにもすっかり浸透していることは、学校評価（肯定的認知比率：児童 97% 保護者 98%）の数値からもうかがえるところです。

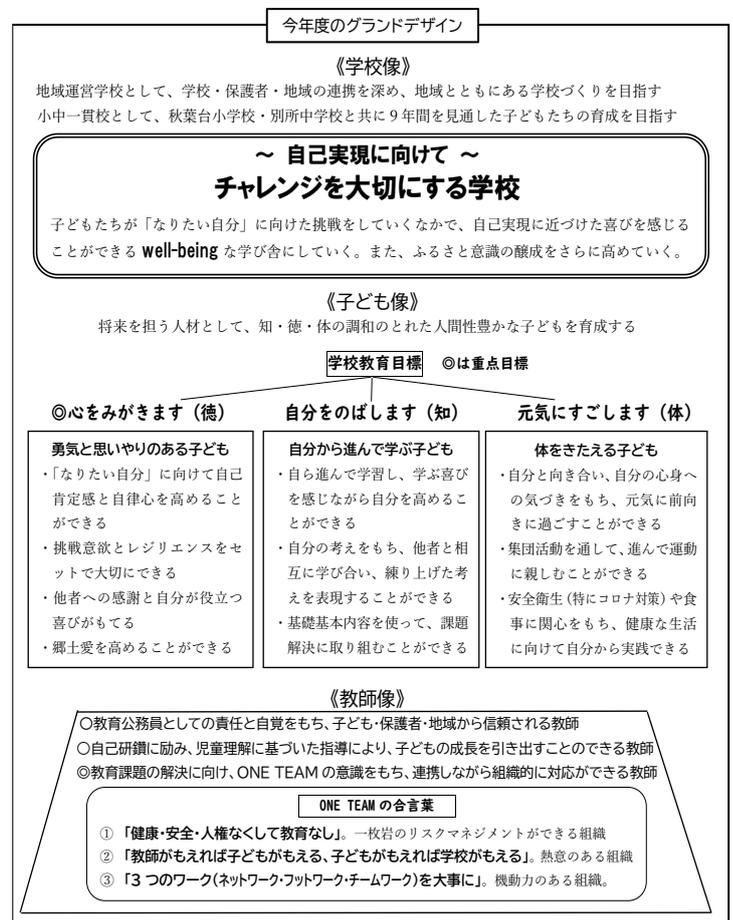
・・・私はもともと、失敗するリスクがあるのにチャレンジをする意味が分からなかった。「失敗してしまうかもしれないのなら、はじめからやらなければいい」と思っていたのだ。（中略）できた瞬間、言葉にならないほどの嬉しさがこみ上げてきた。そして、校長先生の「チャレンジは自分を成長させるチャンスなんです！」という言葉の意味を実感できたとても良い経験となった。この経験を生かし、私はこの先もいろいろなことにチャレンジできる人になりたい・・・

これは、昨年度の6年生が卒業文集に書いた文章（許可を得て一部抜粋）です。全員の卒業文集を読んでいたときに、「チャレンジ」という言葉が文中に何度も出てきたため、ためしに数えてみたところ、なんと88回も使われていたのです。様々なシーンで前向きに頑張っていた前6年生でしたが、ここまで「チャレンジ」を意識して取り組んでくれていたことにあらためて感服するとともに、子どもたちの生きる軸として本校の理念「チャレンジ」が浸透していたことに大きな喜びを感じる瞬間でもありました。

このように、「チャレンジ」という言葉は、すっかり本校の合言葉となっています。

「やってみよう」という姿勢は、幸福度を高めるための最重要因子であるという慶応義塾大学前野隆司教授の **well-being** の研究を参考にしながら、本校では、子どもたちが「なりたい自分」に向かって学び、挑戦し、そして成長できる喜び（幸せ）を味わえる場所でありたいと取り組んできました。そして、本校の教師たちは「自己実現に向けたチャレンジを通して、子どもたちの“幸せ”づくりのサポートに全力を尽くす!」という決意のもと、全力で子どもたちの支援をしてきました。教員自己評価では、肯定的評価が100%であることから、一枚岩での取り組みができたものと思っています。

子どもたちのナイスチャレンジと教員の継続的な支援、そして保護者・地域の皆さんのあたたかい応援のおかげで、子どもたちは今年度も確実に成長することができたことに心から感謝いたします。来年度も引き続き、「子どもたちが自分の可能性に果敢に挑戦できる学び舎」でありたいと考えています。



2 今年度の具体的な取組を振り返って

(1) 豊かな人間性の醸成……特に、いじめの対応を通して子どもの人間愛・人間力を高める

目標	具体的な取組	自己評価
自分とともに他人を尊重する態度の育成【重点】	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ対策として、前年度の確実な引継（4月）、保護者説明（4月）、SC面談（5年全員1学期） ・いじめ対策委員会（週1回）、小中での連携（3回）による組織的対応の強化。昨年度の認知件数（119件）レベルで認知対応 ・スクールロイヤーによるいじめ対応研修を実施し、教員のリーガルマインドを強化 ・各学級で話し合い活動を大切にしながら民主的合意形成と支持的風土の定着強化 ・小中一貫の取組として、通年でいじめや不登校の情報共有を図り、連携強化 ・不登校対応としてSC・SSW・子家セン・民生委員との連携強化と都事業申請。また保護者と連携してEAを活用した登校刺激を実施。 	<p>いじめ対策は予定していた取組は全て実施。スクールロイヤーによるいじめ対応研修を実施し、教員のリーガルマインドを強化。小中一貫3校でのいじめや不登校に対する教員間の情報共有を3回実施。市SVを招いて小中一貫3校合同でいじめ理解研修を新たに実施し、3校教員の共通認識が向上するとともに「はちおうじっこサミット」を通じた連携を強化。いじめの認知は、法的解釈のもと積極的に認知し、早期対応・組織的対応を展開[評価：見 90%保 94%教 100%]。ただ、子どものスマホ所持率が上がっている中、新たにSNSトラブル対応が増加中。情報リテラシー教育の充実をさらに図っていく必要あり。不登校対応については、SSW が定期的に来校して具体的な対策を協議。登校復帰2件。外部と繋がっていないケースは0件。自尊感情・自己肯定感の向上[評価：見 97%保 97%教 94%]。</p>
社会人となる基礎（規範意識・あいさつ・礼儀・自立）の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・自立を目指した取り組みとして、SBGsの継続と「挨拶」「廊下歩行」「靴揃え」を生活指導の重点とし、代表委員会と連携して社会性の向上を図る。全教員が自己申告に記載し一枚岩の対応をさらに強化 ・各学級において、「よいところ応援計画」を実施し、相互理解を図るとともに、自尊感情と自己肯定感を醸成 	<p>教員の一枚岩の生活指導により、子どもの生き方向上[評価：見 95%保 97%教 100%]。特に「靴を揃える」取組みが向上し、来校者に褒められる機会が増加（評価：見 89%教 100%）。また、「挨拶」については、代表委員会・保護者・青少対と連携して実施。重点取組3項目で自律・自立が向上したが、今後も継続の必要あり[到達度：挨拶 90%・靴 89・廊 87%]。縦割班活動による異学年交流を通して、リーダーシップとメンバーシップを育成。課題としては、SBGsの取組において、マナー化が感じられる。新たなアプローチを代表委員会と連携していく必要あり。</p>

「別所小学校がいつまでもより良い学校として残ってほしい。そのために必要なことはなんだろう」と子どもたちが考えたことをまとめたものがSBGsです。本校がよりよい学校として持続していくための13の目標を、これからも大切にしていきます。



(2) 確かな学力の向上……特に、GIGA(一人一台端末)の活用で子どもの学習デザインを広げる

目標	具体的な取組	自己評価
<p>主体的・協働的に学習に取り組む態度と問題解決的な学習の展開【重点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・問題解決的な学びの定着に向けて、校内研究を中心に推進。著名講師の招聘(年4回)や管理職による授業指導(日常+年3回)を実施 ・学習意欲を第一学力と捉えた取組として、教員が教材や導入を工夫する意識が向上中。 ・補習(定期と夏季休業中)を予定通り実施するなかで、子どもに寄り添った学習支援を展開。 ・地域の強みを子どもの強みにするキャリア教育の構築に向けて、小中一貫での検討部会を立ち上げて、現在作成中。 	<p>校内研究会において、問題解決学習について著名な講師から通年指導を受けたことで指導力が向上[評価: 児 97%保 95%教 82%]。地域素材の教材化にも取り組み、子どもの身近なテーマにすることで学習意欲を高めるとともに、問題解決学習を展開しやすいように改善。小中一貫3校の生活・総合学習部会において、キャリア教育における地域素材の教材化について検討・作成。また、学習用端末の活用を推進(問題解決学習では調べる段階・まとめる段階・発表する段階で積極的に活用)[児・教評価 85%]</p> <p>課題としては2つある。1つ目は授業改善に向けた教員の自主的な校内OJTが働き方改革の観点から、時間の確保が難しい点。2つ目は、「しっかり調べて、じっくり考える」というスタイルは定着してきたが、思考の練り上げが不十分である点である。引き続き取り組んでいく必要がある。</p>
<p>基礎学力の定着に向けた取組の強化</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・基礎学力の定着に向けた課題克服支援強化(補習授業10回、朝学習ベーシック週1回以上)と各学力調査分析とミニマムの活用促進 ・地域と連携した学力向上の取組を強化(8月:学校運営協議会の中学生ティーチャーを活用した夏休みの補習、通年:地域学校協働推進委員の放課後学習) 	<p>補習授業(通常・夏季)や学力調査後のSYEMの活用、ミニマムの活用促進で課題克服支援を強化[ミニマム定着度: 国 81%・算 75%]。ただ、中学生のリトルティーチャーは諸事情にて実施できず。小中一貫3校学力向上定着プロジェクトチームにて、キャリア教育プラン検討・作成。昨年度の校内研究成果を生かした学習用端末の活用推進をしたが、学級間での差あり[評価: 児 86%保 95%教 88%]。</p>

R7年度 別所小学校学力向上プラン



(3) 特別支援教育の充実……特に、特別支援委員会を軸にした連携の強化をさらに高める

目標	具体的な取組	自己評価
<p>特別支援教育に関わる体制の強化【重点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援固定級が市内最大級であるスケールメリットを生かした段階別指導の推進や不登校傾向児への個別対応を強化 ・特別支援教育 CO を複数配置（通担・固担・養）とし、全体共有と校内委員会を強化。また、特別支援と生活指導の連携強化を図るため、生活指導主任と特別支援 CO を兼任。週に一回の全体での情報共有を夕会で実施 ・校内の特別支援チーム（コーディネーター・専門員・SC・巡回心理士・サポーター）と外部機関（SSW・教育センター・医療機関等）との連携を図る 	<p>特別支援学級がある学校の強みを生かした発達に関する相談や対応を細やかに実施。特別支援教育 CO の複数配置により、校内委員会による情報共有、保護者との連携、スムーズな引継体制など、特別支援教育に関わる体制が強化(評価：保 93%教 100%)。また、特別支援学級担任に通常学級経験者も積極的に配置することで、教員のインクルーシブな意識も向上。小中一貫 3 校における特別支援教育の向上については、年 3 回の教員間での情報共有や児童生徒同士での交流活動を予定通り実施。特別支援の関係者間での連携・調整体制や教育センターや特別支援学校、医療機関との連携も強化。保護者へインクルーシブ教育の理解促進を図るため、学校と保護者の懇談交流会を 3 回実施。</p>
<p>みずき学級やおおぞら学級と連携したインクルーシブ教育の実践</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・みずき学級の巡回指導教員と連携強化（特別支援専門員・在籍級担任・保護者） ・特別支援学級指導補助員によるおおぞら学級での個別対応の更なる強化 ・通常学級との計画的な交流や共同学習の充実 ・特別支援教室の巡回教員による理解教育の実施 ・都立特別支援学校との副籍交流を実施し、前年度よりも充実を図る 	<p>特別支援学級と通常学級との計画的な交流や共同学習を実施。日常的な交流が充実していることにより、運動会での表現運動や移動教室において、一緒に活動することがとてもスムーズにできた。また、都立多摩桜の丘特別支援学校との副籍交流も計画的に実施。本校の行事にも積極的に参加してもらうことができた。しかし、副籍児童の状態により、昨年度よりも各行事への参加回数は減少。特別支援教室の巡回教員による理解教育を全学年で実施。特別支援学級担任による 1 年生への理解教育も実施。</p>

通常学級の全学年の子どもたちに実施した『特別支援教室への理解推進授業』の一コマ。特別支援教室の巡回教員による授業を受けながら、自分の特性について興味をもったり、個々の違いを生かし合ったりできる集団づくりについて学ぶことができました。



(4) 健やかな心と体の育成と安全な学習環境の整備・・・特に、熱中症対策の徹底で安心を確保する

目標	具体的な取組	自己評価
<p>安全点検・安全指導の徹底と危機管理体制の再整備</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ハイリスクの熱中症への危機管理強化 (WBGT 測定徹底・週案簿安全配慮記載) ・小中一貫 3 校にて学校保健委員会を合同で実施、怪我防止の徹底 (週案記載・安全指導) ・怪我発生時の迅速・丁寧な対応 (保護者連絡・救急対応)、施設点検による危険箇所の発見とヒヤリハットの共有 (安全点検月 1 回) ・教員の危機管理意識の向上 (安全プログラム活用と夕会での確認) ・交通安全教室、セーフティ教室、食物アレルギーチェック体制強化 ・災害対応の強化 (避難訓練・図上訓練等) ・他校の事故事例を受けて常に対応策をアップデート 	<p>「健康・安全・人権なくして教育なし」を合言葉に、リスクマネジメントを強化。怪我や事故防止への危険予知管理 (毎月の安全点検の実施や安全対策を週案記載等) を徹底。毎学期に職員会議で安全研修を実施し共通認識が向上。特に熱中症対策は熱中症の研修を実施して教員の危機意識を高めるとともに、WBGT 測定や対応内規の作成、子ども向け熱中症理解教育などに注力し、熱中症発生 0 件 (評価: 保 99% 教 94%)。食物アレルギー対応におけるヒューマンエラー防止策をさらに強化。学級閉鎖の際には丁寧な情報発信をするなど、発信力を強化 (保 98%)。校長による朝の横断歩道の安全指導強化や自転車教室の実施により子どもの意識が向上 (5 年間交通事故 0 件)。小中一貫 3 校にて学校保健委員会を合同開催することで、各校の健康診断結果による児童の実態を学校医も含めて情報共有・対策検討。</p>
<p>東京オリンピック・パラリンピックのレガシー、国際理解を深める取組の推進、体力や運動技術の向上、【重点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫 3 校の体力テストから児童生徒の傾向を分析し、連携した対策を作成 ・体育部による「体力テストにチャレンジ」企画を実施し、測る機会ではなく挑む機会とし、全校で楽しく盛り上げて、体を動かす意識を向上 (1 学期)。外遊びを活性化させて、日常的な体力向上に取り組む [児評価 75%] ・冬季オリンピックに合わせた意識向上と国際理解の取組 (3 学期)。 ・プールの外部施設活用に伴う実施体制の再構築。 	<p>小中一貫 3 校の体育主任同士の情報交換会や合同学校保健委員会を実施し、体力面の課題を共通認識して取組を講じているが、猛暑の影響もあり、大きな向上にまではつなげられていない。しかし、体育委員会企画の集会や外遊びの推進による子どもの意識には変化が生じており、3 年前よりも 20 ポイントも上昇 (評価: 児 77% 保 81% 教 89%)。来年度は、体育館エアコンが稼働できるため、夏場の活動も可能になるので、改善が見込まれる。水泳学習は、関係機関と連携して安全に実施したが、運営面に改善の余地あり。子どもの安全を第一に、来年度も実施していく。</p>



(5) 家庭・地域との連携、開かれた学校づくり……特に、地域素材の教材化で郷土愛を高める

目標	具体的な取組	自己評価
<p>保・幼・小・中の15年間を見通した一貫教育の充実</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣の保育園・幼稚園と連携して小1プロブレム等に対応 ・秋葉台小学校と別所中学校と連携した小中一貫教育の推進（教員交流年3回・児童生徒間交流1回等、ふるさと学習の検討） ・丁寧な引継による不登校や配慮を要する子どもへの対応 	<p>保幼小連携は、入学前に園児と1年生との交流活動を実施し、園児の小学校進学への緊張を緩和するとともに、教員間での情報交換を実施。小中一貫3校における児童生徒交流の実施（部活動体験や授業見学、合唱参観等）、小中一貫3校の協働体制の構築（職層・職務ごとの連携や地域学校協働活動推進委員同士の連携）を推進。小中一貫3校にて、来年度のキャリア教育の計画を作成、中一プロブレム対応として教員間の丁寧な引継ぎの実施、小中一貫3校の各校に共通掲示板を設置し認知度も向上（評価：保93%教100%）。</p>
<p>子どもたちのふるさと意識を醸成するために、家庭・地域との連携強化 【重点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本遺産サミットの取組を継続し、八王子市への郷土愛の醸成を図る。また、校内研究において「ふるさと学習」に取り組み、地域素材の教材化を推進〔見評価90%〕。地域学校協働推進委員を活用した地域のボランティアとの連携（栽培・放課後子ども教室等） ・健全育成活動の連携（クリーンデーや挨拶運動など）。 	<p>校内研究とも連携して、地域素材の教材化に取り組むなかで、地域の強みを子どもの強みにする取組を充実させることができた。特に長池公園を中心とした「もの」「ひと」「こと」の教材化が充実してきた。来年度のキャリア教育につなげていきたい（評価：見88%保85%教82%）。</p>
<p>保護者・地域への積極的な情報発信と学校評価の活用</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・来校の機会設定（学校公開・行事・保護者会・個人面談等） ・学級便り・学年便りの発行（月1回以上）と学校ホームページの更新（各学年週1回以上） ・一斉メールシステムによる情報発信の充実や正門掲示板を活用した地域への情報発信 ・学校運営協議会の定期的な開催と学校評価の活用 	<p>「いつでも開放」のスタンスを基本とするとともに、行事の際にはYouTubeによる配信で地方の祖父母の方にも見ていただけるようにDX化を推進。学校ホームページは学年によって掲載ペースに差が生じている課題あり。学校便りは4ページというボリュームのある内容で、様々な情報を発信。正門掲示板はSSSを活用した「季節の飾り」を掲示し、地域から好評価。学校評価による外部の声を反映した新年度計画の作成を推進。</p>

(6) 学校組織の機能強化……特に、集団の組織力向上と個々の“強み”作りでマンパワーを強化する

目標	具体的な取組	自己評価
<p>情報共有の徹底と指示系統・合意形成の確立による組織的対応力の強化と人材育成 【重点】</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・統括主任教諭を設置し、ミドルリーダー層の活性化を図る ・調整会を設定し、合意形成と調整機能を向上（週1回実施） ・組織を改編し、重点課題の克服と効率性の向上を図る ・経営会議を行い、課題発見と各分掌の連携を強化（週1回） ・2年先を見据えた校務担当配置を行い、効率化と持続化を図る。 ・自己申告を活用した担当分掌を通じた人材育成（年3回） ・学校評価を生かしたPDCAによる校務運営の更新（年2回） 	<p>主幹2名体制に新たに統括主任教諭を加えた体制を構築。指示系統と合意形成が強化。自己申告の共通記載事項を設定し、重点項目について全職員が自分の立場でできることを明文化。面談を通して取組状況の確認と共通認識を向上させながら一枚岩の取組を継続し、効果大（評価：教100%）。育休4名、臨任の途中退職や病休者などもあり、学校のマンパワーが厳しい時期もあったが、教職員が踏ん張ってくれた。このような事情もあり、若手OJTの推進が十分に実施できなかった。今後、さらなる学級減による教員数減に対応した組織改編も要検討。分掌内で異動者を見据えたスムーズな引継方法や人材育成を更に向上させていくことが課題。</p>
<p>サービス事故の防止に努め、子供・保護者・地域からの信頼を向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・市内のサービス事故増加傾向を受け、定期的なサービス研修だけでなく、時期によって起きやすいサービス事故の種類に応じた声かけをするなど、適時性のある取り組みを展開 ・管理職だけでなく各担当や主幹からも全体に注意喚起させる（通年） 	<p>時期的に起きやすいサービス事故を焦点化して注意喚起するとともに、指導・助言を実施。調整会でも常に話題し、気になることがあった場合にはすぐに改善するとともに、学年間でのチェック体制を強化（サービス研修受講100%）。管理職からの縦のラインの指導と合わせて、主幹や学年主任からの横のラインでの声かけも実施し、事故防止の風土を構築中。今後は、更なるリーガルマインドの育成強化を図っていく必要あり。</p>
<p>働き方の改革の推進による「組織の健康」を向上</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・出退勤システムによる自己管理力の強化と副校長による指導助言の充実（時間外在校時間月45h以内達成70%） ・働き方改革の保護者理解を促進（保護者会・学校便りでPR年2回） ・男性教員の育業に関わる休暇取得の促進を図る（4月に周知・通年で声かけ） 	<p>SSSやEA、サポーターの活用を通して、教員の負担軽減は推進。時間講師の積極的な申請により、担任の空き時間を創出。働き方改革の一環として18時以降の電話応対終了や定期的にノー残業デーを実施。時間外在校時間については、達成度の二極化傾向が課題。会議や情報共有のやり方に課題あり。保護者への理解促進として、保護者会と学校便りでアナウンスを強化。来年度は、時間外勤務の更なる縮小を図っていく。</p>

